



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4473号 2018.7.6 発行

複合福祉施設を総務相が視察...金沢

読売新聞 2018年07月05日

入居者と懇談する野田総務相（左）＝金沢市若松町で

野田総務相は4日、金沢市若松町の高齢者向け住宅などの複合施設「シェア金沢」を視察した。

同施設は、高齢者や学生向け住宅、児童福祉施設などが同じ敷地に集まっており、若者や高齢者、障害者が一緒に生活している。先進的なまちづくりのモデルケースとして、2016年度のふるさとづくり大賞で総務大臣賞を受賞した。

野田氏は施設を見学し、入居者らと懇談。野田氏が出馬の意欲を見せている9月の自民党総裁選について、入居者から「頑張ってください」と激励される場面もあった。

視察後、野田氏は「誰もが一緒にコミュニティの中で支え合うまちづくりを実践している」と感想を述べた。総裁選への激励については、「期待していただけるのは励みになるので、しっかり良い仕事をしながら理解を深めていければ」と話した。



ひと@あいち 認定NPO法人「ひょうたんカフェ」代表理事 橋本思織さん（50）／愛知

毎日新聞 2018年7月5日

障害者の力、商品で発信

温かな雰囲気の木製テラスのある建物「ひょうたんカフェ」。扉を開けると調理場からドーナツのいい香りが漂う。奥では織り機で布を織る人や、テーブルの前に座って思い思いの時間を過ごす人たちがいて、ゆったりとした空間が広がる。

倉庫を改修して造られた建物には、織りや絵画などを行うデイセンター▽豆腐やドーナツの製造販売・カフェ運営・手織り商品製作・販売をするワークセンターーなどが入り、障害を持つ人らが利用する。

橋本さんは、元は名古屋市内の知的障害者施設職員だった。当時の同僚の井上愛さんが、カラフルな糸を自在に組み合わせて仕上げる織りを施設に導入。障害者の感性豊かな作品に出会い、「それまで指導やケアの対象だった人たちとの垣根が取り払われ、互いに認め合える関係になった」と振り返る。

施設を退職し、井上さんと共に2003年4月、「地域の織りの拠点」を目指して同市中村区で工房を設立した。その後設立したNPO法人「ひょうたんカフェ」に事業を引き継ぎ、障害者らが織りに取り組むと同時に、作品展も行った。さらに働く場を求める声に応え豆腐工房も始めた。12年に現在の場所に移転し、1日あたり約30人が利用する。

橋本さんは利用者の男性と共に、出来立ての豆腐や油揚げを車に乗せて地域で巡回販売している。「直接商品を届けることで社会とのつながりが生まれ、私も彼の人生も豊かになっています」とほほ笑む。

5月末～6月初めには、ジェイアール名古屋高島屋での催事に出店し、織りの実演や販

売を行い盛況だったという。「百貨店側でも、作り手としての我々の魅力を感じてくれたのでは」と喜ぶ。利用者たちがドーナツを作る時、計量一つにも手を抜かず、洗い物も丁寧で手際が良い。それぞれが作家として活躍する織りも、コツコツと糸を織り上げ、感性を生かした作品になる。橋本さんはこうしてできた商品を「力がある。だから出店の声がかかる」と評す。

買う人、作る人、スタッフ、全員がひょうたんカフェを作っている人たちだという。「障害者は『かわいそうな人』というイメージを覆したい」との願いは、すてきな商品の数々を通して社会に届けられている。【岡村恵子】

■人物略歴 はしもと・しおり

1967年、稲沢市生まれ。津田塾大卒後、一般企業などを経て95年、名古屋市内の知的障害者施設に職員として就職。2003年3月に退職。06年、NPO法人「ひょうたんカフェ」を設立し代表理事。現在のカフェの場所は同市中村区砂田町2。



障害児と園児 交流絵本に 読売新聞 2018年7月5日
絵本「みんなだいすき」を前に制作時を振り返る大谷さん(右)
と鈴木さん(大津市で)

◇彦根・大谷さん 実話基に制作

◇共に成長する姿 描く

障害がある子どもを受け入れた保育園に、優しさの輪が広がる——。彦根市の理学療法士大谷淳さん(71)が、実話を基に、保育園に入った障害児3人と園児の交流を描いた絵本「みんなだいすき」を出版した。大谷さんは

「子どもたちの物語が、大人に残る『心のバリア』を解かずきっかけになれば」と話している。(生田ちひろ)

大谷さんは県立小児保健医療センター(守山市)を経て長浜市内の病院などに勤務し、これまでに500人以上の障害児らに運動療法を施してきた。

その中で保護者から度々相談されたのが、たんの吸引など医療的ケアが必要だと、看護師不足などで一般の保育園や小学校に通いにくい、という現実だった。一方で、入園できた多くの子どもたちが友達との触れ合いの中で成長し、その友達も心優しく育つことを目にしてきた。

大谷さんは、地域の保育園などに通う意義を伝えようと、2年前にスタート。車いすで生活する男女3人の実際の出来事をストーリーに仕立てた。

1人目は脳性まひの女の子「さきちゃん」。入園すると、他の園児から「どうして歩かないの」などと質問され、母親が「病気で歩けないけど、バギーでどこへだって出かけるよ」と笑顔で答える。園児らは散歩で道端の花を見せたり、給食では口や手を拭く世話をしたりし、卒園式では「さきちゃんと同じ学校へ行きたい」と泣き出す。

2人目のダウン症の男の子「ひいちゃん」は、大人が手を焼くほどのいたずらっ子。友達と遊ぶ中で自分で立てるようになったことを、母親が卒園式で感謝する。

3人目は年少組に入った「れあちゃん」。保育士とハイハイで鬼ごっこをしていると、友達もハイハイと一緒に楽しむ。年長になると、運動会のかけっこに歩行器で参加し、友達や観客の拍手に包まれてゴールインした。

知人で、絵を依頼された大津市の日本画家・鈴木靖将さん(74)は「障害のある子と一緒にいることで、周りの子どもたちも優しくなれる。どんな子どもも皆大きな存在だと改めて教わった」と話し、大谷さんは「子どもたちは障害を自然に受け入れ、学び合い成長する。絵本を通じて、子どもから大人へのメッセージを受け取ってほしい」と願っている。

A4判31ページで1400円(税別)。絵本の問い合わせは新樹社(03・3525・8141)。

弱者避難の計画難航 東海第二30キロ圏 住民96万人 東京新聞 2018年7月5日



東海第二原発の30キロ圏自治体にある高齢者施設。避難には支援が必要になる＝茨城県内で

東海第二原発（茨城県東海村）の三十キロ圏内の十四自治体は、約九十六万人の住民を対象にした避難計画作りに苦勞している。特に高齢者や病人、障害者ら体の不自由な人の避難をどうするのか。冬場は大雪に見舞われる福島・会津地方に車での避難を想定する自治体もあり、課題は山積みだ。（鈴木学、酒井健）

二〇一一年三月の

東京電力福島第一原発事故では、多くの高齢の入院患者らが避難途中で亡くなった。移動手段の確保が難しかっただけでなく、受け入れ先のめどがないまま、無理に移動した結果だった。

この反省から、県は自由に動けない高齢者や障害者が一時的に屋内退避できる施設の整備を急ぐ。県が把握している十キロ圏内だけで、主な病院や社会福祉施設は計三十五カ所。そのうち国の補助金を受けて、本年度までに二十五カ所（整備中を含む）で放射性物質が入り込むのを防ぐシェルター化を進める。

改修が終わった東海村の特別養護老人ホーム（入所者九十人）の男性理事長は「原発事故の際は、現実的には屋内退避になると思う」と話す。水や食料の備蓄は一週間分あるという。

ただ、事故の規模が大きければ、避難を余儀なくされるケースもある。五キロ圏内だけで、避難の際に車いすやストレッチャーなどの支援が必要な人は、県の推計で千五百人に上る。車両は約千台必要となるが、確保のめどは立っていない。

県が想定する避難先は三十キロ圏外の施設。だが、老人ホームの理事長は「逃げるのには時間がかかる。入所者は移動に長い時間かかると、健康上のリスクが高まる」と懸念する。



◆豪雪地域への移動に不安 常陸太田
避難で使う道路は、除雪車がたびたび行き交う＝2月、福島県会津若松市で

三十キロ圏内の常陸太田市では、約五万一千人のうち約一万人が、原則マイカーで福島県の会津地方に避難する計画。避難先のうち、福島県下郷町（しもごうまち）、会津坂下町（ばんげまち）、湯川（ゆがわ）村などの五町

村は全国屈指の豪雪地域だ。

普段雪が少ない地域の住民が、雪の中を車で避難することは現実的なのか。記者は二月十三日、最も遠い約百七十キロ離れた湯川村への避難ルートを車で走ってみた。山間部に差しかかると、道の両側に高さ二メートル前後の雪の斜面が迫り、除雪された路面にも白く雪が張り付く。冬用タイヤでもハンドルをとられ、夜になれば危険性が高まる。



常陸太田市防災対策課の担当者は「感触として、冬用タイヤを持つ市民は半数もいない。原発事故に備え『冬用タイヤを買ってほしい』と市民に求めることはできない」と頭を抱える。

湯川村に避難することになる地区の元町内会長の中村正人さん（68）は「どこか違う避難先はないのかと言いたくなる」。同地区の主婦（59）は「一台が事故を起こせば大渋滞になって、大勢が雪の中に閉じ込められる」と不安を口にした。

三十キロ圏人口が全国最多で、幹線道路に車が集中すれば、福島での事故時より激しい渋滞が予想される。また、地震や津波で避難先も被災すれば、住民の逃げ場がなくなる。県は第二の避難先の確保も検討しているが、手が回っていない。

◆きょうから意見募集

原子力規制委員会は五日～八月四日、東海第二原発の審査書案について意見募集（パブリックコメント）する。応募方法はインターネット、郵送、ファクスの三通り。いずれの場合も規制委のホームページから「パブリックコメント」をクリックし、東海第二原発の項目にアクセス。ネットは「意見募集案件」から電子政府の総合窓口のページに入り、「意見提出フォームへ」をクリックし、必要事項を書いて送信する。

郵送やファクスは、電子政府総合窓口で「意見提出用紙」をダウンロード。宛先は〒106 8450 東京都港区六本木1の9の9、六本木ファーストビル 原子力規制庁原子力規制部審査グループ実用炉審査部門宛て。ファクスは03（5114）2178。

四半世紀も監禁された息子 親の責任感と孤立の末 内部におりが設置されていたプレハブ倉庫=兵庫県三田市

産経新聞 2018年7月5日



兵庫県三田（さんだ）市の住宅で、精神疾患を抱える長男（42）が20年以上にわたり一畳ほどのおりの中に入れて閉じ込められていた。長男の腰はくの字に曲がり目はほぼ失明の状態。同居する父親（73）から相談を受けた三田市が長男を福祉施設に入所させ、兵庫県警は監禁容疑で父親を逮捕した。一家はどのような悩みを抱え、地域や行政とどう関わっていたのか。孤立した家庭への支援のあり方も問われている。

広さ1畳、食事は2日に1回

「息子が暴れる。（約25年前の）16歳のころから閉じ込めていた」

た」

今年1月18日、父親から福祉関係者への相談をきっかけに長男と面会した三田市職員に、父親は長男を閉じ込めていた理由を明かした。おりは一軒家の庭のプレハブ倉庫の内部に設けられた。高さ約1メートルで広さは一畳ほど。市職員を前に、長男はおりの中で「体育座り」をしたまま、下半身をさらけ出していた。

父親は市職員に「精神疾患で暴れて近所から何度も苦情があり、迷惑になると考えた」と経緯を説明。おりの中にはファンヒーターや扇風機が置かれていたが、排便は床のマットの上に垂れ流し状態だった。

父親の仕事はタクシー運転手で、日々の業務は深夜まで続いた。長男は主に父親が留守の間はおりの中で過ごし、父親が帰宅後の午後10時ごろから約12時間は外に出ることを許された。父親は「2日に1回のペースでご飯を食べさせ、風呂にも入れていた」と供述する。

それでも、劣悪な環境によって長男の腰はくの字に曲がり、目はほとんど見えなくなっ



ていた。障害者手帳を持っていたが、最近は病院で治療を受けたり、福祉サービスを頼った形跡はなかった。

転居前の大阪でも「座敷牢」

長男は父親と母親、きょうだいとの5人暮らしだったが、母親は市職員との面会当時、すでに末期がんだった。面会4日後の1月22日には、虐待を受けた疑いがあるとして、市が父親の了承のもと、長男を県の福祉施設に入所させた。母親は1月末に亡くなった。父親は4月7日に長男を監禁した疑いで県警に逮捕された。

6月19日には神戸地裁で初公判が開かれ、父親は長男が福祉施設に保護されるまでの生活実態を赤裸々に語った。

弁護士「長男の障害に気づいたのはいつごろか」

父親「2歳くらいの時」

弁護士「長男とどのようなコミュニケーションをとっていたのか」

父親「言葉が話せないのでコミュニケーションは一度もない。(長男に)喜怒哀楽はあるが、普通のひとと違い、何か理由があつて笑ったり泣いたりはしない」

一家は平成3年に大阪市内から三田市に転居。長男の閉じ込めは大阪時代に始まっていた。

弁護士「(大阪で)どのような生活をさせていたのか」

父親「当初は一人部屋で生活させていた。暴れて妻の腕を噛んだりひっかいたりしたため、大工に頼んで『座敷牢』のようなものを作り、自分が留守の間はその中に入れていた」20年以上前に市職員も「おり見たはず」

今回の事件は、今年1月に市職員がおりの中の長男と面会したのを機に発覚したとされる。ところが法廷での父親の証言によると、父親は三田に転居した約2年後に長男の障害について市に相談しており、当時自宅を訪問した市職員も、おりの中の長男の様子を確認していたはずだという。

弁護士「三田ではなぜプレハブを建てたのか」

父親「部屋で跳ねるし、あまりにもうるさかった。近所から苦情も相次いだ。プレハブの中のおりに入れば、少しは収まるかと思った。材料を買って私が作った」

弁護士「(長男を)病院に連れて行ったことは」

父親「転居後2～3回行っただけ。妻もパートで働いており、車で病院へ行くことが負担だった」

弁護士「(1月以前に)市職員が自宅を訪問したことは」

父親「(転居から約2年後の)平成5年ごろに職員2人が長男との面会で自宅を訪れた」

弁護士「市は記録上、おりの中の長男は確認していないと言っているが」

父親「自分の記憶ではおりの中の長男を見ている」

弁護士「その後の職員らの対応は」

父親「文書などが送付されてくると思っていたが、何もなかった」

一家の異変…周囲も認識

父親は1月に市職員と面会した際、長男の世話に加え、末期がんで闘病中の妻の介護で憔(しょう)悴(すい)しきっていた。そうした状態になるまで、福祉施設への入所を行政に相談しなかった理由について、父親はこう続ける。

弁護士「福祉施設の世話になろうとは考えなかったのか」

父親「希望しても順番待ちで入れないと思った」

弁護士「行政機関に相談しなかったのはなぜ」

父親「親が元気な間は面倒を見たいと思った。ところが妻の命が長くないと知り、(死去直前に)相談した」

弁護士「父親としての責任はどう考えているのか」

父親「もっと早く行政に相談して施設に入れる努力をすべきだった。反省している」

後悔の念を口にする父親だが、一家の異変には周囲も気づいていた。

近所に住む無職の60代女性は取材に対し、「障害のある人が住んでいるという噂は聞いたことがある」。一家の向かいに住む80代女性は「たまに『わー』という叫び声が聞こえた」と話し、「周囲が無関心だったために（父親は）誰にも相談できなかったのかもしれない」と気遣った。

市によると、平成5年ごろの自宅訪問とは別に、5年ほど前にも親族が社会福祉協議会に長男について相談した。ところが、生命の危険はないとして保護は見送られていた。

一家に対する市の対応をめぐっては、1月の長男保護から県警への通報まで約1カ月を要するなど不手際も明らかになっている。市は一連の対応が適切だったかどうかを検証するため、社会福祉士や弁護士らで構成する第三者委員会を設置して関係者への聞き取りなどを進めている。

社会全体の課題に

立命館大産業社会学部の山本耕平教授（福祉臨床論）は、今回の事件の背景には障害者への差別があると指摘する。

山本教授によると、戦前の日本には家族が障害者を自宅の一室に閉じ込めて外部との関係を絶つ「座敷牢（私宅監置）」と呼ばれる文化があった。昭和25年制定の精神衛生法で禁止されたが、その後も障害者への「差別」や「隔離」は社会に根強く残った。そのため、障害者を家族に持つ家庭が積極的に外部に支援を求めることは容易ではないという。

山本教授は「障害者への支援は家族の問題でなく、社会全体の課題として取り組むべきだ」と指摘した上で、今回の事件については「家族が誰にも相談できないまま、孤立したことで起きた悲惨な事件。『自分たちで何とかしなければ』という思いから行き過ぎてしまったのではないかと説明する。

公判は、父親が起訴内容を全面的に認めたため、検察側が懲役1年6月を求刑し即日結審。地裁は6月27日、弁護側の要求通り、執行猶予付きの判決を言い渡した。周囲や福祉制度は一家を救えなかったのか。一家が自ら困難から抜け出すことはできなかったのか。

法廷で長男との今後の関わりについて問われた父親は、言葉少なにこう答えた。

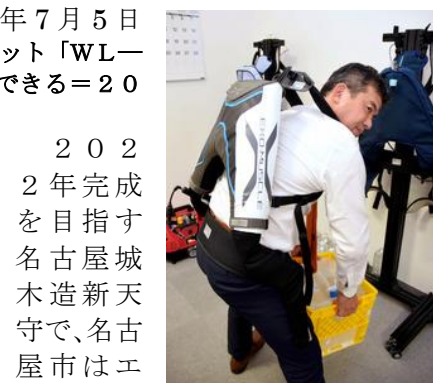
「福祉施設の世話になるとしても、それで終わりではない。私たちは親子だから。できるだけのことをして見守っていきたい」

愛知) 名古屋城木造天守、EVに代わる「新技術」とは？ 関謙次、北上田剛



レベーターを設置せず、「新技術」でバリアフリーを実現することを決めた。河村たかし市長が挙げる「ロボット」や「人工筋肉」とは、どういうものなのか。開発する企業を訪ねた。

朝日新聞 2018年7月5日
テムザックが開発した二足歩行ロボット「WL-16RⅢ」。2本の足で階段を昇降できる＝2006年4月26日、東京都新宿区



2022年完成を目指す名古屋城木造新天守で、名古屋市はエ

福岡県宗像市の「テムザック」は2006年、人を乗せて階段を上られる二足歩行ロボット「WL-16RⅢ」を早大と共同開発した。足元のセンサーが段差を感知し、片足に6本ずつあるシリンダーが伸縮して移動する仕組みだ。まだ実用化されていないが、高本陽一社長（62）は「過去に転倒したことはなく、歩行レベルも上がっている」。河村市長は5月初旬に京都市の同社研究所を訪れ、「障害者が車いすを乗り換えずに済むようにしてほしい」と要望したといい、同社は設計に着手している。

東京都新宿区の「イノフィス」が扱う「マッスルスーツ」は、筒状のゴムをナイロンで包んだ「人工筋肉」を内蔵する。背中に装着し、空気を送るとゴムが膨らんで元に戻ろうとする力が発生。約25キロの補助力となり、重い物を持ち上げる負担を減らす。13年から60万～80万円で販売されており、介護施設や工場などで使われている。同社の古川尚史社長（47）は5月末に名古屋市役所に招かれ、河村市長に試着してもらった。「介助者や人的支援のスタッフをサポートする技術に応用できる。障害者自身が装着するスーツも考えられる」という。

社説：名古屋城木造化 シンボルになり得るか

中日新聞 2018年7月4日

名古屋城天守閣の木造再建で「忠実な復元」を訴える河村たかし市長はエレベーター設置を拒否している。だが、巨額な税を投入する公共施設だ。このままで本当に市のシンボルになり得るのか。

河村名古屋市長は二〇〇九年、耐震を理由に天守閣の木造再建を提起。一七年三月に市議会が基本設計費などの予算案を可決し、五百五億円の巨大事業がスタートした。市長は一七年四月の市長選でも木造化を争点の一つに掲げ、「天守閣には実測図があるから強烈な本物性がある」と、史実に忠実な復元にこだわる理由を訴えた。

確かに、一九三〇年の国宝指定直後の実測図や写真が戦災を免れ、「忠実に復元できる唯一の城」との専門家の意見もある。

選挙戦で市長は「百年で大抵、国宝になります」と述べたが、あくまで実測図に基づく「木造新築」である。築城時の天守が現存する姫路城などの国宝と同様に価値を論じるのは無理があろう。

旧天守は空襲で焼失。市民が費用の三分の一に当たる二億円を寄付し、「二度と燃えないように」との思いを込め、一九五九年に鉄筋コンクリートで再建した。

確かに、市長だけでなく議会も木造復元を認めた判断は重い。だが、有識者による「石垣部会」は「江戸時代から残る価値ある石垣を、復元で傷める恐れがある」と警告。復元の許可権限を持つ文化庁も、それを重くみている。

事業費は完成後の入場料収入などでカバーできると主張する市長は「百億円を寄付で」と呼びかけるが、まだ二・二億円余。焼失天守再建時のような熱き思いは市民に共有されているだろうか。

市長は五月末、はりや柱が忠実に復元できないとして、エレベーターを設置しない方針を表明。障害者団体は抗議のハンストを行い、「高齢者や障害者など誰もが登れる名古屋城に」と訴えた。市長提案の、搭乗可能なドローンなど十一の「新技術」は現実味に乏しく、むしろ反発を強めた。

現在の法律では火災対策のスプリンクラー設置なども必須であり、「忠実復元を理由にエレベーターだけ排除するのはおかしい」とする障害者らの訴えは、すこぶる合理的な問題提起である。

市民の不戦平和への思いが詰まった現在のコンクリート製天守には、文化庁も言うように「本物」の価値がある。あえて「本物」を壊して造る一。その意味をいま一度、十分かみしめるべきだ。

ジミー大西の半生ドラマ化 20日からネット配信 大阪日日新聞 2018年7月5日

“（明石家）さんまの子分”ジミー大西（54）の破天荒な半生を描いたオリジナルドラマ「Jimmy（ジミー）～アホみたいなホンマの話～」（吉本興業制作）が20日から世界同時にネット配信される。公開までいわく付きのドタバタ経過があり、ジミー本人と主演の中尾明慶（29）に裏話を聞いた。

ポスターの前で得意のポーズを取るジミー大西（左）と中尾明慶＝大阪市中央区の吉本興業本社



本来は今年の今ごろには有料配信サイト「Netflix（ネットフリックス）」から一般公開されているはずだった。ところが完成後のPR時期に、さんま役の小出恵介（34）が未成年女性と交際トラブルを起こし謹慎処分に。ジミー役の中尾とダブル主演の形を取っていたので一挙に作品公開のメドが立たなくなった。しかし芸歴43年目で初のプロデュースを手掛けたさんまの熱意で、スタッフ、俳優が1年後に再結集。さんま役には玉山鉄二（38）が起用された。

「玉山さんのさんまさんは当然雰囲気も小出さんと異なるので、監督に直接の絡みシーンだけでなく前後の撮り直しもお願いした」という中尾。「やっている本人にすると、まったく別の作品をもう1本撮った感じ」としみじみ。

ジミー役について「人というより動物みたいだった」と言い「僕は最初よく分からなかったので、ネットとかでジミーさんの事を結構調べた。撮影に入ってから逆に物まねにならないようにして、自分なりのジミー像をつくっていった...」と振り返る。

図らずも2回演じることになって、「もうこんなことは2度とないでしょう。あつたら困るけど...」と苦笑。横で聞いていたジミー本人は「僕は別に撮り直しなかったんで...」とニコニコ。劇中では、40年近く前の吉本の劇場が醸し出す独特のハチャメチャな雰囲気を芸人から裏方まで徹底してリアルに再現。9話すべてで最初と最後に本物のさんまとジミーが登場し、当時の裏話を軽妙に語るシーンが楽しい。

ジミーは「僕はさんまさんの運転手をさせてもらって、ここまで育ててもらった。若いころはホンマのアホでしたから。大阪の方は僕のアホぶりを知ってくれてはる人が多いと思うんやけど、この作品で世界中の人にアホが知れ渡る。かえって生きやすい」と屈託ない。

一時天才画伯と画壇でも注目されたが、最近はタレント活動に一体化。「舞台は他の出演者やお客さんと絡んで、トライアングルでいろいろな事が入ってくるんやけど、絵は自分だけの一方的な放出作業。ドツと疲れる。それに絵だけでは食べられへん」と告白。

今が人生で一番楽しいそうで、「絶対に若い時に戻りたくない。あのころはアホやけどガムシヤラに必死で毎日やってただけで。それでも食われへんし、寝られへんし...。もう1回やれ、言われたら絶対無理」と語気を荒らげた。

14日にはYESTHEATER（イエスシアター）（なんばグランド花月地下）で全9話（約4時間半）の「イッキ観（み）る試写会」を実施（参加募集は終了）。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行